

國學院大學學術情報リポジトリ

アートとしての公園が環境問題に果たす役割：
モエレ沼公園の事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八幡, さくら, Yahata, Sakura メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000768

アートとしての公園が環境問題に 果たす役割

—モエレ沼公園の事例から

八幡さくら

序論

わたしたちの生活において身近なアートとは何だろうか？部屋に飾られたポスターや写真、花瓶や置物、ギャラリーや美術館での展覧会、駅前のオブジェなど、様々なものが挙げられる。中でも子どもの頃から身近にあり、何気なく利用してきた空間として公園がある。その形態は多様であり、子どもたちの遊び場、草花の鑑賞の場、憩いの場など、様々な目的や用途を持った公園がわたしたちの生活圏には存在する。公園とは、人間の生活を快適かつ豊かにするという目的のもと、人の手によって設計され、技術によってその土地の風景と一体化するような理想的な形へと造形されたものである。この点で、庭園と同様に公園もまたアートという枠組みに含まれるし、自然や環境とアートとの関わりを問いかけるものだ。本稿では、芸術家によってある理念のもと、公共空間における芸術作品として構想された公園が、わたしたちの環境意識や自然観にどのような影響を持ちうるのかを問う。その一例として本稿では北海道札幌市にあるモエレ沼公園を取り上げる。モエレ沼公園は、芸術家イサム・ノグチ（1904-1988）によって設計され、ゴミの埋立地の上に造成された都市公園である。モエレ沼公園は公共空間に造られたアートであり、その成立と運営は行政と市民との協働によって支えられており、今日までわたしたちに豊かな美的体験を与え続けている。そのため、モエレ沼公園はゴミ処分という生活に結びついた環境問題に対して、公園という形でアートが果たしうる役割を考察する上で非常に重要な視座を与える。

本稿では、まず第1章で都市公園の役割と、モエレ沼公園およびイサム・ノグチの構想について紹介し、第2章でモエレ沼公園の造成史から行政と市民がいかに協働してきたのかを、市民団体「モエレ沼公園の活用を考える会」に注目して分析する。第3章では、モエレ沼公園で行われた札幌国際芸術祭に着目し、そこでのテーマを掘り下げながら、環境問題に対するアートの役割を考察する。以上

の議論を通して、本稿は、モエレ沼公園の事例から、ごみ処分という環境問題に対し、アートを紹介することによって行政と市民の協働による持続的活動がいかに可能となったのかを呈示する。この事例研究を通して、わたしたちがアートを介して環境問題をどのように受け止め、未来へつなげていけるかを考察する。

1. 都市公園としてのモエレ沼公園

1.1. 都市生活における公園の役割

公園の問題を考察する前に、現代社会における自然という問題を押さえておきたい。わたしたちは自然というものを考えるとき、具体的にどのようなものを想像するだろうか？わたしたちの身の回りは植木や花壇の花、街路樹、運動場の芝生、橋の下を流れる河川など様々な自然のもので溢れている。しかし、そのほとんどは人の手によってデザインされ、整えられたものだ。地球上で人間が足を踏み入れている土地などないと言われる現代において、無垢なままの手付かずの自然というものはある種の理念的なものである。もちろん自然保護区や国立公園などはその理想的自然状態を保つことが目指されているため、人間の手ができるだけ入らないように管理される。しかし、わたしたちの生活圏において接することの多い自然はむしろ人の手が加わっているものが多い。例えば、わたしたちの身近にある公園を取り上げよう。公園は設計に沿って植樹された木々や花々、造設された池や川、整えられた遊戯場や小道、ベンチなどによって成り立っている。公園内の植物や設備は人間によって保全・管理されることで健全に整えられているが、その一方で、園内の植物はそれ固有の生命力によって成長し、雨風や気候に応じてその姿を変えていくのであり、単なる生命力を持たない人工的なものとは区別される。このように公園という一例をとってみても、自然と技術を明確に区分するのは難しい。そもそも庭園や公園は人によって設計され、自然や土地を利用し、そこに新たな風景を生み出そうとするものなので、自然と技術とが共存する場所とも言える。人口が多い都市になれば、自然の風景が少なくなるため、公園の役割はさらに増す。

国土交通省によれば、都市公園の役割は「都市環境の改善、都市の防災性の向上等」にあり、良好な都市環境の提供、都市の安全性の向上、地震・大火に対する防災、市民の活動や憩いの場の形成、地域づくり・地域活性化の拠点となることが目指されている⁽¹⁾。都市公園は大きく、住区基幹公園、都市基幹公園、大規模公園、国営公園、緩衝緑地等の五つに分けられる。その都市に住む人々の利用を目的として設置される都市基幹公園は、さらに総合公園と運動公園の二種類に分類され、本稿で取り上げるモエレ沼公園は総合公園に分類される。総合公園とは、「都市住民全般の休息、観賞、散歩、遊戯、運動等総合的な利用に供することを目的とする公園で都市規模に応じ1箇所当たり面積10～50 haを標準とし

て配置する」ものである⁽²⁾。北海道の都市公園は7,669箇所、総面積14,085ha、人口一人あたりの公園面積に換算した場合、29.6㎡となり、全国一人あたりの公園面積の二倍以上にあたる全国一の広さになっている（2022年3月31日現在）⁽³⁾。

都市公園は、都市に暮らす人々の休息や散歩、遊戯など多様な目的で使用される場であるが、その歴史は古く王侯貴族の狩猟地に遡ることができ、それが今日のような住民の生活や憩いの場として利用されるようになるのは、近代都市の発展との関係を抜きには語れない。北村清彦によれば、ロンドン、パリ、ニューヨークに19世紀半ば以降に造成された公園はみな、都市や共同体が抱えていた社会的問題、すなわち、急速な人口増加による生活環境の悪化、特に公衆衛生状況の悪化と結びついており、疫病の防疫、災害の防災、戦時の防衛の機能が期待されている⁽⁴⁾。さらに、公園を含む周辺地域の環境整備を進め、日常的に心身共に健康な生活を過ごすための場所、あるいは文化的活動の拠点として、近代における公園は都市の重要な基盤施設かつ社会資本だったという⁽⁵⁾。

わたしたちの身の周りにある公園を振り返ってみよう。公園には様々な役割が担わされているが、まずもって様々な人が利用する公共空間であり、人々の生活圏にある。都市計画の中で公園の設置は必須であり、その理由は地域の景観づくりのためだけでなく、住民の心身の健康のためでもある。例えば、公園は子育ての場であり、子どもたちの遊び場、働く人々の休憩場所、犬の散歩路でもあり、災害時の避難所でもある。公園はそれを中心にした地域づくりが組まれる拠点でもあるのだ。

それでは公園を芸術作品として造る場合、そこにはどのような観点が加えられるだろうか？公園は、上述したような日常生活における心身の健康、安全、交流の場であり、身体を通して経験される楽しみを享受する場である。公園の中の木々の間を吹き抜ける風に癒され、季節の花に目を楽しませ、小川の水の流れに涼しさを感じる。公園のベンチに座り、行き交う人々の流れや子どもたちの遊ぶ姿に目をやりながら、日々の忙しさから一時解放されて息を吐く。公園はコンクリートや鉄筋で固められた設備や施設などの人工物だけではなく、そこに囀る鳥や木々や花々などの植物、水の流れといった自然物が伴う。様々な年代の人々が集うことができる場として公園は設計され、住環境の一部を形成する。そうした公園設計は、都市の風景を創り出すランドスケープ・デザインとも呼ばれ、人々の生活を豊かにし、創造性を高めるような場を生み出すことが求められる。

このような都市における新しい風景を生み出す構想のもとに、芸術家によって造成された公園として、北海道札幌市のモエレ沼公園がある。モエレ沼公園はゴミ埋立地上に造成された公園として有名であり、都市生活に不可欠なゴミ処理のような環境問題に対して、アートがどのような役割を果たしうるかを考察する上で非常に有益な視座を与えてくれる。

1.2. 都市公園としてのモエレ沼公園とイサム・ノグチの大地の彫刻

モエレ沼公園の基本的な情報を整理しておこう。モエレ沼公園という名前は元々アイヌ語の「モイレ・ベツ」に由来し、「静かな水面、ゆっくり流れる」を意味する。公園のある土地は元々沼地であり、今なお公園の周囲には穏やかな水面を保った沼地が残る。モエレ沼公園は事業主体を札幌市とする北海道札幌市東区にある総合公園である。場所は札幌市の中心部からは離れているが、約30分バスや車に乗って行くことができる。モエレ沼公園の2021年度の来場者数は札幌市民も含めて約73万人と報告されており、市民のみならず観光客にも人気スポットだ⁽⁶⁾。芸術家イサム・ノグチは「公園全体が彫刻」であるという壮大な構想のもと、この公園の設計のマスタープランを作った。公園の面積は188.8 ha（内陸100 ha）、造成工事費250億円、工事期間は20年を超え、その規模は物理的にも経済的にも非常に大きい。通常の都市における総合公園が10～50 haを標準に設置されていることと比較すると、その大きさがさらに際立つ。さらに公園の下には約270万tものゴミが埋め立てられている。

公園内には幾何学的形態を多用した、ノグチのデザインに基づく様々な施設がある。その一例を挙げれば、鉄筋とガラスで作られたイベント・展示空間であり、カフェなどを併設する「ガラスのピラミッド」、高さ52 m（標高62.4 m）のなだらかな人工の山「モエレ山」、高さ30 mの階段状に石段が積み上げられた古代遺跡のような「ブレイマウンテン」、その向かいにあるステージを含む建物「ミュージックシェル」、他に「海の噴水」や遊具、水場などがある。広大な園内にはサ



モエレ山から見たブレイマウンテン（撮影筆者）

クラやモミジ、カラマツ、ポプラなどの樹木や草花が植えられており、四季の移ろいを感じられる。またモエレ沼公園には環境に配慮した様々なシステムが導入されており、冬の雪を利用した雪冷房システムや外気冷却、太陽熱を利用した空調システムなどを設置・利用している。さらに公園の周囲にある沼地は周辺地域を洪水から守るための一時雨水貯留池になっており、渡り鳥などの野鳥が観察できる自然環境を損なわないように保全活動が行なわれている。まだ公園が建設途中だった2002年、ゴミの埋立地というネガティブな要素が複合的に存在する土地を活性化し、周囲の住民や生活者に歓迎される場を作り上げた点、札幌市による開発プロデュースの手腕・実現に対する飽くなき情熱が評価され、グッドデザイン大賞を受賞している⁽⁷⁾。

イサム・ノグチは、日本人詩人であり英文学者でもあった野口米次郎とアメリカ人作家レオニー・ギルモアの子としてロサンゼルスに生まれ、その後母ギルモアとともに日本へ移住した。彼は二つの国のアイデンティティの間で葛藤し、その人生は歴史に翻弄される過酷なものだった⁽⁸⁾。1918年に彫刻家を目指して渡米し、芸術学校での教育を受けたのち、1927年にパリの彫刻家ブランクーシのアトリエで働くようになる⁽⁹⁾。その後、北京、メキシコ、ヨーロッパ、エジプト、インド、日本などを世界を旅行し、様々な文化や芸術のエッセンスを取り入れながら、自身の彫刻作品を制作する。彼の作品は大小様々な彫刻作品からドロ잉、《あかり》という照明器具や家具、庭園など幅広いジャンルにわたり、1988年にニューヨークで亡くなるまでその精力的な活動は続けられた。とりわけ彼は人生後半に庭園や公園など公共空間をアートとして制作するという活動を行う。こうしたイサム・ノグチの公園や庭など環境的な作品を、ジョン・パズレイはアース・ワークの系譜上に位置付け、都市における風景アートの社会的な貢献をしたアーティストとして、ニューヨークをはじめとする都市の公園や遊技場を提案したノグチの名を挙げる⁽¹⁰⁾。アース・ワークは、ランド・アートとも呼ばれ、1960年代末からアメリカを中心として興った、屋外においてその土地の自然素材を利用し、土木工事のように大規模な制作プロセスを経て造られた芸術作品のことである。さらに、大規模な工事や公共事業などを通して公共空間を芸術作品として制作するランドスケープ・アートやパブリック・アートというものも登場してくる。こうした美術史の流れの中で登場してきた、自然環境との関係において作品を理解しようとするアートを指して環境アートとも呼ぶ⁽¹¹⁾。

ノグチの環境アートの根幹にあるアイデアとして庭を挙げることができる。ノグチは幼少期に母と訪れた鎌倉の寺院の庭での思い出があり、また日本の庭園に関して強い関心を示し、その歴史や造園術を学び、アーティスト人生を通して庭園に対して強く興味を持っていた⁽¹²⁾。こうしたノグチの庭に対する関心は、近代建築の庭園部分の制作や彫刻庭園、公園などの設計に発展していく。ノグチは既存の彫刻概念を覆す、彫刻と大地とが一体化し、複合的に関わらせる環境空間

としての「ランドスケープ」の構想に惹かれていき、その構想は1933年に「プレイマウンテン」というプランとして考案される⁽¹³⁾。ピラミッドの形状を模して人工的に石を積み上げられたこの《遊び山》(プレイマウンテン) というモニュメントは、のちにニューヨークのセントラルパークの遊園地計画としてニューヨーク市に提出される。その計画が却下されたのちも、ノグチは案を修正して、彫刻と身体がより体験的に関わり合うような遊び場として《形だけで作るプレイグラウンド》の計画を再度提出するが、残念ながらそれも市に受理されることはなかった。その後も庭と公共空間に対するノグチの関心が消えることはなく、ノグチは世界各国に様々な庭園・公園を制作していく⁽¹⁴⁾。彼は庭園を「個々の彫刻を超えたひとつの全体的な彫刻空間の体験」として捉え、「庭全体がひとつの彫刻なのだ」と考えるに至る⁽¹⁵⁾。つまり、ノグチの目指す庭は身体を通して直接体験される空間全体であり、遊びを通して人々が関わり合う相互作用の場である。

モエレ沼公園はノグチが最晩年に取り組んだ作品だ。札幌市はノグチに作品の設置を依頼し、彼が1988年札幌市を訪問した際にいくつか候補地を案内する。その中から、当時不燃ゴミの埋め立て地として利用されていたモエレ沼をノグチは選ぶ。ノグチは「人間が傷つけた土地をアートで再生する。それは僕の仕事です」と述べ、「公園全体がひとつの彫刻作品」という考えを提示し、周辺の環境や景観と調和をはかりながら、ダイナミックな地形造成を行うというマスタープランを形成する⁽¹⁶⁾。その公園計画にはノグチが1930年代から考案し続けていた「プレイグラウンド」の構想が取り入れられている。プレイマウンテンはもちろん、子どもたちが思いきり駆け回ることができる、なだらかな起伏や幾何学的な形状がモエレ山や様々なモニュメントにも反映されている。ノグチは行政担当者と協議しながら基本構想を調整し、マスタープランを完成した後、工事が始まる前の1988年の暮れ病いでこの世を去る⁽¹⁷⁾。そのため、計画の実現は遺志を託された関係者と札幌市に任される。

2. モエレ沼公園造成史から見る行政と市民の活動

2.1. 公園造成史

モエレ沼公園は非常に長い年月をかけて造成された公園だ。その経緯にはマスタープランを作ったノグチの死も関係しているが、それ以前から長い年月をかけてゴミ処分と公園建設計画が練られていた。モエレ沼公園の完成には行政側の努力だけでなく、市民の側のモエレ沼公園の建設を後押しする動きがあったことも大きい。こうした行政と市民の協力的な活動がいかにして行われてきたのかを検証するため、モエレ沼公園の造成史を見ておこう。以下に公園の造成史に関わる行政と市民の代表的な動きをまとめた⁽¹⁸⁾。

モエレ沼は豊平川の蛇行で作られた河跡湖（三日月湖）である⁽¹⁹⁾。モエレ沼

モエレ沼公園造成史から見る行政と市民の活動

行政の動き	市民の動き
1973 モエレ沼公園を都市環境公園とする	1978 カムバックサーモン運動、環境問題への意識向上
1977 跡地公園利用を前提にゴミ最終処分場としてモエレ沼地区買収開始	
1979 モエレ処理場として利用開始	
1982 「環状グリーンベルト構想」、公園基盤造成	1992 ブラック・スライド・マントラ設置記念の文化的活動「マントラの会」
1988 ノグチ札幌視察、モエレ沼公園造成希望、基本設計を委託契約、マスタープラン完成	
1989 本格的な工事の開始	
1992 公園の部分開放開始 札幌市大通公園に《ブラック・スライド・マントラ》設置、除幕式（翌年現在地に移動）	1996 大通資料館にて「イサム・ノグチ&ルイス・カーン；ランドスケープ展」開催
1998 モエレ沼公園一次オープン式	1998 「イサム・ノグチ展」（札幌の彫刻の森）開催
2003 ガラスのピラミッド完成記念式典開催 ガラスのピラミッド完成記念「イサム・ノグチ展inガラスのピラミッド」（MFCと共催）	2003 「モエレ沼公園の活用を考える会」設立 オープン記念「連続講座」開催 ガラスのピラミッド完成記念「イサム・ノグチ展inガラスのピラミッド」（市、公園緑化協会と共催）
2004 モエレ山オープン	2004 「イサム・ノグチ生誕百年」記念連続講座
2005 モエレ沼公園グランドオープン	2005 モエレ文庫出版、スペシャル・ワークショップ開催
	2011 NPO法人「モエレ沼公園の活用を考える会」設立

のある札幌市北部の伏籠川流域は低平地で過去に幾度も洪水被害を受けていた。これは人口の急激な増加を伴う都市化によって、保水・遊水機能が低下したことが原因だった。この洪水被害を防止すべく、国・北海道・札幌市が連携して総合的に伏籠川流域の治水対策が進められる。その一環として、モエレ沼も元々持っていた遊水機能を高めるべく、1982年から遊水池が拡大される整備が行われ、約



モエレ沼公園周辺の沼地とガラスのピラミッド (撮影筆者)

192万tの一時雨水貯留池となった。遊水池の掘削で生じた土砂は周囲の築堤と当時札幌市が計画していたスポーツとレクリエーションのための水郷公園構想に生かされる事になる。

1973年に札幌市はモエレ沼公園を都市環境公園として指定し、同年行政は同地をゴミ最終処分場として利用し、その後公園を設置することを目的にモエレ沼地区を買収し、1979年には処理場として同地にゴミの搬入を開始する。一方市民の側では1978年から「カムバックサーモン運動」が盛んになる。この運動は人口の急増で下水道整備が追い付かず、生活排水による水質悪化が原因で豊平川に戻って来なくなった鮭を再び川に呼び戻そうという環境保護活動であり、この運動とともに市民の環境問題に対する意識が高まってくる。1982年には行政が札幌市の市街地を公園や緑地の帯で包み込む「環状グリーンベルト構想」を提出し、モエレ沼公園はその拠点公園とされ、公園の基盤造成が進められる。1988年に札幌市からイサム・ノグチに公園設計依頼があり、いくつかの候補の中から彼は当時ゴミの処理場であったモエレ沼を選ぶ⁽²⁰⁾。しかし、ノグチはマスタープランとなる平面図と2000分の1のサイズの模型を遺し、同年逝去する。当時札幌市の行政内ではイサム・ノグチの計画に反対の声や対立が生まれており、ノグチの逝去によって計画を白紙に戻すべきという声もあったという。しかし、ノグチにマスター・プランの実現を託された関係者の努力によって計画が進められることになる。その結果、モエレ沼公園建設プロジェクト体制が生まれ、イサム・ノグチの基本設計をもとに、札幌市緑化推進部が担当となり、監修をイサム・ノグチ財団

のショージ・サダオ、設計統括を設計事務所アーキテクトファイブ、設計管理統括者として川村純一、ランドスケープ関係を斎藤浩二が担うことになった⁽²¹⁾。また1998年の公園の一次オープンに合わせた地元札幌テレビによる「イサム・ノグチ展」の企画やドキュメンタリー制作等の広報活動によって、公園を設計したアーティストとモエレ沼公園が広く市民に認知されるようになったことが、建設の支援に繋がったと川村は述べる⁽²²⁾。その後もマスタープランとなるノグチの模型から実際の公園を実現するために様々な努力が続けられる。

1992年から完成された公園部分が開放されるようになると共に市民にモエレ沼公園が認知されるようになっていった。同年、ノグチの彫刻作品《ブラック・スライド・マントラ》が大通り公園に設置され、その設置を記念した文化的活動「マントラの会」や「イサム・ノグチ&ルイス・カーン；ランドスケープ展」の展覧会などを市民の有志が企画する⁽²³⁾。ガラスのピラミッドの完成を控えた段階において、ノグチの遺志を継承して完成後の公園を管理運営についての方針が公園造園課内でまとめられたが、公園管理を担う管理課での承認がされなかった。行政によるモエレ沼公園の管理運営の姿勢に対して、上述の文化的活動に関わっていた市民の有志が不十分さを感じ、市民自らが行政と協力してその役割を担うことを決意する。その結果、2003年に市民の有志によって市民団体「モエレ沼公園の活用を考える会」（モエレ・ファン・クラブ）（以下MFC）が設立され、モエレ沼公園への市民の意識や認知度向上のため、それ以後様々な講座やコンサート、ワークショップなどが毎年開催されるようになる。2003年にはガラスのピラミッドの完成を記念して、記念式典と展覧会「イサム・ノグチ展inガラスのピラミッド」（札幌市と札幌市公園緑化協会、MFCとの共催）が開催される。1988年本格的に着工してから17年後の2005年にモエレ沼公園はグランドオープンを迎え、公園全体が開放される。同年MFCではグランドオープンに際して様々な企画が組まれた。こうしたモエレ沼公園における行政と市民の協働での公園運営のあり方が評価され、2006年に全国都市再生まちづくり会議「まちづくり賞」をはじめ多数の賞を受賞する。2011年にMFCは特定非営利活動法人（NPO）として法人化され、今日までモエレ沼公園に関する多岐にわたる活動を続けている。

2.2. 市民活動が支える公園の質—モエレ沼公園の活用を考える会

ここでは市民側の働きかけとして、「モエレ沼公園の活用を考える会」の活動に注目したい。NPO法人となったMFCの「目的」は『定款』の第2章「目的及び事業」第3条に以下のように明示されている。

この法人は、モエレ沼公園の理念や設計思想が正しく次代の子どもたちや市民に引き継がれ、いつまでも生き生きとした空間として活用されることを目標に活動が続ける。その活動は、①モエレ沼公園の魅力や価値を多くの人に伝える

〈広報活動〉、②創造都市札幌の核のひとつとしてモエレ沼公園を活かす〈創造的活動〉、③札幌の環境保全のシンボルとしてのモエレ沼公園をより豊かにする〈環境活動〉を大きな柱として多彩な取り組みを展開し、行政や他団体と協働のモデルケースを作る姿勢を持ちつつ、札幌の更なる文化的まちづくりに寄与することを目的とする。⁽²⁴⁾

MFCは上記の〈広報活動〉〈創造的活動〉〈環境活動〉という三点を活動の柱として様々な企画・活動を行っている。具体的には、1) イサム・ノグチやモエレ沼公園に関わる芸術家についての展覧会やコンサート、同芸術家やモエレ沼公園のデザイン、まちづくりに関わる講座、2) 子どもたちとモエレ沼公園で行われるワークショップ、3) 環境を守り育て、将来を提言するため、シンポジウム開催やアート作品の清掃、札幌市にまちづくりの提言を行うといったことが挙げられる⁽²⁵⁾。また、4) 書籍やグッズ販売などを通したモエレ沼公園を世界に発信していくことを目指している。

さらにMFCのホームページでは、モエレ沼公園を行政と市民が協働運営し、利活用を図り、その公園の質向上を目指していると述べられる。

従来、公園は「公共施設」として行政が「整備」「管理」「運営」をするのが通例でした。私たちは、公園を利用する主体の「市民」と「行政」がしっかりと協働して「運営」し、様々な「利活用」を図ることが、公園そのものの質を高めることになると考えています。このことは、イサム・ノグチの精神である「人々の生活の中で役に立ち、人々の心を豊かにすることが芸術の存在意義」という理念にも合致するものです。また、今日の社会の要請でもある地球環境保全や地域活性化の問題に應えるためにも、公園をさらにユニバーサルな視点で見直し、行政に対して必要な提案を行い、幅広い市民参加を実践することによって、行政と市民の協働のモデルケースとして、札幌の文化的なまちづくりに寄与していくことを目指しています。⁽²⁶⁾

すでに前節のMFCの設立経緯でも説明したように、MFCは「行政と市民の協働モデルケース」を目指し、その実践を主導することを活動の目的としている。MFCには年会費を払えば（ボランティア会員は無料）誰でも参加できるようになっており、広く市民に門戸が開かれている。この幅広い市民参加によって、市民自らが自身の生活環境や地域の問題を見直すことができ、その問題を行政に訴え、解決のため協力していくことで、自発的にまちづくりを行っていくことができる。モエレ沼公園という一つの場を契機として、様々な環境問題や地域の問題の発見へと繋がるのである。さらに先の引用箇所で注目すべきは、モエレ沼公園が人々の生活に有用であり、人々の心を豊かにする、「芸術」とみなされており、

その公園が生活の中で利活用されることによって、その公園の「質」が高められるという点である。

2.3. 行政と市民の協働と公園の価値

MFCの活動趣旨からは1) 行政と市民の協働、2) 公園の質という二つの観点を導き出すことができる。まず1) について考察しよう。上述されたように公園とはそもそも行政が整備・管理・運営するものである。モエレ沼公園も都市における他の公園と同様、無料で公開されており、他の都市公園同様に管理されているものの、芸術作品として管理・保全されているわけではない。市民がそれらの活動と行政と協働で行なっていく場合に、どのような形が考えられるか。一つには、行政による公園の整備・管理・運営のあり方に対して、MFCのようなNPO団体を中心に市民が監視し、問題点について行政に要望を出すということ、そしてもう一つはそうした行政の仕事に協力するというあり方が考えられる。加えてMFCが行っているようなワークショップや講座など、市民による自主的活動もある。行政だけにその管理・運営を任せるのではなく、市民が自らの地域の公園を守り活用するために主体的に活動していくことで、両者の協働が可能になる。こうした協働はモエレ沼公園の造成時から続いている。

それではこの行政と市民の協働を可能にしている動機は何であろうか。その理由として考えられるのが、モエレ沼公園が札幌市の公共の財産、かつ、未来世代に残す価値のあるものとして認識されているということである。先に引用したように、MFCは活動理念として、「モエレ沼公園の理念や設計思想が正しく次代の子どもたちや市民に引き継がれ、いつまでも生き生きとした空間として活用されることを目標に活動を続ける」ことを掲げている。ここで「次代の子どもたち」という場合、それは現世代の直接的な子や孫だけでなく、さらに続く世代をも含むものだろう。アーティストによって構想され、札幌市と市民によって完成されたその公園は、現世代がどのように都市の環境問題を引き受け、未来世代までを視野に入れた人の暮らしをデザインしていくかを問題提起する。

ここでのモエレ沼公園の価値とはどのようにして生まれてくるものなのか？この問いには2) 公園の質という観点が関わる。公園の質とは、人がそこを訪れることによって身体的に経験される感情や感覚を通して獲得し、判断されるものだ。例えば、定期的に手入れ元気に育っている樹木や植物、老朽化する前に修繕や改築されて安全に保たれた設備や遊具、頭上に空の広さ、山を登った時に見渡せる公園の開けた展望、吸い込む空気の新鮮さ、澄んだ川や池などの水場等に触れ、感性を通して、すなわち美的に経験する。こうした美的体験によってもたらされる心地よさを享受することで、人はその場所が持つ質を判定することができる。このように美的経験を通して獲得される質が高ければ、人の暮らしを豊かにし、より良いものへと導くため、公園はより価値のあるものとしてみなされる。

さらにこの価値の問題にはモエレ沼公園がどういう存在であるかということが関係する。まずモエレ沼公園の価値づける重要な要素として、1) ゴミの埋立地の上に造成された公園、2) 芸術作品としての公園、という二つが挙げられる。人間が生活をする上で必ず出てくるゴミや廃棄物は、今日わたしたちが抱える深刻な環境問題の一つであり、リサイクルできないものに関しては埋め立てという形でこれまで処理されてきた。その埋立地の上に公園を作ること、不要となったものの上に人々の新たな生活空間を創出し、そこに人の流れを生み出す。通常次世代にとって負の遺産として捉えられるゴミという存在が公園へと変貌を遂げたことによって、その建築過程も含めて次世代に伝えられるべき存在に転換する。しかし、ただ美しい場所に生まれ変わったことで問題が終わったのではなく、埋められたゴミの土壌汚染や植物への影響などは継続的に観察されねばならず、今もなお続く環境問題をモエレ沼公園はわたしたちに呈示している。

モエレ沼公園が市民に守り続けられる理由には、2) 芸術作品としての公園という認識が肝要だと筆者は推察する。公園が芸術作品として認識されることによって、モエレ沼公園に対して、芸術という美的価値づけによるある種の作品保護意識が生まれる。ただし、美術館の中に展示され、あらゆる外的影響から守られるような芸術作品と同様の仕方では、公園は保護されない。それが公共空間としての公園である以上、人々によって日常的に散歩や運動、レジャーで利用され、気候の変動による影響を受け、その様子を日々変えていく。園内の建築物は安全性や機能を考慮して保全され、動植物の成長などは人間が時に手を加えながら見守り、世話をする。ノグチが理想としたように、公園が憩いの場であり、子どもたちが遊び、市民が相互交流する場であり続けるには、市民による継続的な保全と、その公園の魅力を他の人に伝え共有するための文化的活動が不可欠である。イサム・ノグチのモエレ沼公園の理念を引き継ぎ、将来にわたる生きた活用法を考えるMFCは市民の有志による非常に稀な組織であり、MFCの芸術的に質の高い諸活動が「この公園を芸術作品として成り立たせることを可能にしているように思われる」と北村も指摘する⁽²⁷⁾。生きた芸術作品であるモエレ沼公園を後世へ伝え利用していくためには、常に公園の保全や周知活動に対する市民の努力が重要になる。

また、芸術作品としてモエレ沼公園を実感できるのは、訪れた人自身の身体の五感を通した美的体験を通してである。そして、モエレ沼公園を訪れる人々はその体験が充実した楽しいものであればあるほど、逆説的に、自らの足元に埋まっているものに思い出さずにはいられない。こうしたモエレ沼公園の美的体験を通して環境問題や土地の歴史を想起させる力に注目して、今日までMFC以外にも様々な芸術活動が行われてきた。

3. 環境問題に対するアートの役割

3.1. モエレ沼公園を舞台に開催される芸術祭の事例

モエレ沼公園を舞台に開催される芸術活動の事例を通して、さらに芸術作品としてのモエレ沼公園がどのように利活用され、人々の意識を変えていくのかを検証しよう。その一例が札幌国際芸術祭である。2006年に札幌市は「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、新しいコト、モノ、情報を絶えず発信していく街」を目指すという「創造都市さっぽろ宣言」を行い、芸術文化を通じたまちづくりを始める⁽²⁸⁾。2010年に札幌での国際芸術祭の2014年開催を目指し、民間の有志によって札幌ビエンナーレ・プレ企画委員会が発足し、その後企画の開催・芸術祭の基本構想が策定される。2013年には札幌市はユネスコから、創造的・文化的な産業の育成・強化による都市の活性化を目指す世界の各都市が、国際的な連携と相互交流を行うことを支援する「メディアアーツ都市」として認定され、翌年に第一回目となる札幌国際芸術祭2014が開催され、以降この芸術祭は3年に一度開催される。ただし、2020年の芸術祭は新型コロナウイルスの世界的大流行の影響で中止となり、芸術祭の特別編が開催された。

札幌国際芸術祭2014はテーマを「都市と自然」、サブテーマを「自然」「都市」「経済・地域・ライフ」とし、音楽家坂本龍一をゲストディレクターに迎えた。この芸術祭は近代化の歴史を振り返りながら、21世紀の札幌・北海道の自然、都市のあり方、経済、暮らしを模索することを目的にし、札幌市全体を会場として開催され、会期中に約48万人が来場し、うち7万人超がモエレ沼公園に足を運んだ⁽²⁹⁾。モエレ沼公園では札幌市の歴史やアイヌの歴史とアートに関する展示やパフォーマンスが行われた。

三年後の札幌国際芸術祭2017は音楽家大友良英をゲストディレクターに迎え、テーマを「芸術祭ってなんだ?」、サブテーマを「ガラクタの星座たち」として開催された。会期中の来場者は約38万人、会場の中ではモエレ沼公園の来場者が最も多く約13万7千人だった⁽³⁰⁾。「芸術祭とは何か」という問いは、多様な人々が暮らす都市社会をどのように組織し、札幌市という都市で行われる芸術祭の意義について問題提起する⁽³¹⁾。大友によれば、芸術祭のサブテーマ決定にはモエレ沼公園がきっかけになったという⁽³²⁾。そこはかつて広大なゴミ捨て場、まさに「ガラクタの墓場」であり、人間が傷つけた土地をイサム・ノグチがアートによって再生した地だ。大友は、モエレ沼公園を芸術祭の「はじまりの地」として位置づけ、ノグチの構想した、アートによる「再生」を遡ることを目指す。さらに大友は、モエレ沼公園の造成と芸術祭の歴史がともに市民運動によって担われてきたことを踏まえ、都市において市民同士がアートで繋がり、協働で盛り立て

ていく芸術祭を構想する。

どのような方法でアートによる「再生」に立ち返ろうとしたのかは、モエレ公園で行われたプロジェクトは「RE/PLAY/SCAPE」(8/6-10/1)に見ることができる。モエレ沼公園内の施設ガラスのピラミッドを拠点にして、公園内に展開されたこのプロジェクトは、イサム・ノグチの視点を現代へつなぐことを目指しており、遊びの場であるPlayspaceとしてのモエレ沼公園という場を現代芸術家によって新たに「再生」(Replay)し、創造的な場を作り出すことを目標として様々な作品が展示された⁽³³⁾。具体的な作品の一例として、大友良英と青山泰知、伊藤隆介による《(with) without records》は、まず芸術祭の前に作品制作ワークショップが行われ、集められた百台以上の中古のレコードプレイヤーを、金属やプラスチックなどの素材を利用して加工し、ノイズやリズムを奏でるように、市民の参加者とともに作り変えるところから始まる。それらがガラスのピラミッド内に展示され、鑑賞者は展示空間内を自由に移動しながら、プレイヤーが奏でるノイズやリズムを体験する。古くなって使われなくなった機材を作品に再産出する試みは、鑑賞者としてだけでなく、制作者としても一般の参加者をアート活動に巻き込み、制作と鑑賞の両過程で「ガラクタ」をアートの力で「再生」することを体感できる。

別の作品を挙げよう。伊藤隆介の《長征—すべての山に登れ》というモエレ山に展示されたインスタレーション作品は、より直接的にモエレ沼公園を埋立地の歴史にリンクさせる。百台以上の廃棄・放置された自転車を、人工の山であるモエレ山へと登っていくように並べた作品は、乗り手がいなくてもかわらず、意志を持っているかのように山の頂上を目指して列をなしている。鑑賞者はその自転車群を見ながら、自身も公園を歩き山に登って眼前の広大な風景に見渡す。過去には使用されていたが、今では「ガラクタ」になってしまった自転車の列は、自転車の車輪の下に、そして、それを追いかけて歩く鑑賞者の足元に、埋まっている過去の「ガラクタ」としてのゴミを思い起こさせる。このようにモエレ沼公園で展示された作品群は、空間と作品とが呼応することによって埋立地の記憶を想起させる。これらの作品を鑑賞することで、そうした過去の負の遺産がアートによって作り変えられ、市民の生活を豊かにする場として生まれ変わったということを、鑑賞者は改めて実感する。アートを通して風景に対する見方が変わり、ゴミ処理や環境の問題について考えるきっかけになる⁽³⁴⁾。

3.2. モエレ沼公園の事例分析を通して考えられる環境問題に対する芸術の役割

現在わたしたちが直面している温暖化の問題やゴミ処理、水質汚染などの深刻な環境問題を、芸術が具体的にかつ早急に解決するのは難しい。もちろん空気を浄化する作品を設置することで空気汚染を減らすというようなアートはありうるが、多くのアートはそうした実行力を持たない。それでは芸術は上述のような環

境問題に対して何を成しうるのか？

筆者はモエレ沼公園の事例分析を通して考えられる環境問題に対するアートの役割として以下の三点を挙げる。その三点とは、1) 地域史への眼差し、2) 自然の豊かさの認識、3) 市民活動の場から観光地へ、である。まず1)と2)はモエレ沼公園を自らの身体を通して体験することによって得られるものだ。モエレ沼公園を訪問し、そこでモエレ山に登ったり、そこから公園の景色を眺めたり、水場で涼んだり、プレイグラウンドに座ったり、といった自らの身体経験を通して、わたしたちは場所を体感し、そこでの楽しみを享受する。その土地の雄大さや空の広さ、緑の豊かさを体感すると同時に、わたしたちはそこが過去にはゴミの埋立地であり、かつ、自らの足元に埋まっている膨大なゴミがあることに思いを馳せる。さらに公園内陸部とは対照的になるべく手をつけずに保全された沼地を見れば、その土地が元々は「静かな水面」であったこと、そして、現在再び多様な生物が生息するようになっていくことを知り、環境保全についても意識が向かう。このようにモエレ沼公園は札幌市とその公園の歴史を体感する場になっている。それゆえ、モエレ沼公園というアートを体験することで地元の地域史を知り、自然環境に対する意識変化が生じる。

最後に3) 市民活動の場から観光地へという点について触れる。モエレ沼公園はイサム・ノグチが最後に取り組んだ作品として、そしてゴミ埋立地が都市公園へと生まれ変わった場所として、国内外から多くの観光客が訪問する場所となった。モエレ沼公園のホームページには、埋立地から公園が造成されるまでの歴史やノグチの構想、グリーンエネルギー、環境保全活動などの情報などを見つけることができる。また実際にモエレ沼公園を訪問すると、その公園造成史や理念、生息する動植物や環境保全活動を知らせる展示やパンフレットなどを様々な場所で見つけ、こうした取り組みが現在も行われていることに気づく。このことからモエレ沼公園はそこを訪問する人々に環境問題への意識を喚起する場になっていると言える。さらにこうした経験が世界中から訪れる人々に共有されることは、都市におけるゴミ問題や公園という公共空間に対する関心と呼び、問題を広めていくことにつながる。

自然環境と地域史を学びながら観光するエコツーリズムが声高に叫ばれる現代では、観光と環境問題は切り離せない。モエレ沼公園のように、都市におけるゴミ処理問題と土地の歴史を踏まえた上での実現された公園を訪れることで、自然環境や都市の抱える問題に触れながら、訪問者は自身の住む地域や故郷での同様の問題に思いを馳せる。このことが可能になるのは、イサム・ノグチによって構想され、札幌の人々によって実現された芸術作品であり、今も市民によって守り育てられている、モエレ沼公園という類い稀な存在だからだ。

結論

芸術は、多くの場合、直接的にまたは即座に環境問題を解決できるものではない。なぜなら、ゴミ埋立地の上に公園を造成したからといって、増え続けるゴミ問題を解決できたわけではないからだ。しかし、アートは人々の意識やモノの見方を変え、刺激することはできる。モエレ沼公園を訪れる人々は、そのアートを自らの身体を通して享受しながら、その公園の規模の大きさを体感し、同時にそこに埋められている膨大なゴミの量、工事の過程、現在まで続く環境配慮や経過観察を知り、そうした環境問題に思いを馳せる。一人の芸術家の壮大な構想と、行政と市民の協働によって成し遂げられたその公園は、今もお行政と市民の協力によって保全され、活用され続けている。このような継続的な活動を可能にしているのは、モエレ沼公園というアートが持つ力であると同時に、そこに住まう人々の努力である。このアートが未来世代にまで担われるということは、ゴミ処理問題や自然環境保全という環境問題に向き合い続けることでもある。以上の議論から、アートによって人々の環境問題に対する意識を変化させることができるため、アートは環境問題に対してある一定の寄与をしようと結論する。そこで得た問題意識をいかに継続し、未来世代も見据えて、自らの環境問題に対する行動や生活スタイルを変えるかどうかは、個々人の意志と行動に任されている。本稿で見てきたように、モエレ沼公園の事例では、市民活動さらには芸術祭という市民以上の人々を含み込む形で環境問題に関わる問いを投げかける活動が継続されており、一つのアートを出発点に、多くの人々と課題を共有する場が今なお生み出され続けている。

- (1) 国土交通省都市局公園緑地景観化ウェブサイト「公園とみどり」、「都市公園の役割」
https://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/p_toshi/yakuwari/index.html (2022年 7 月28日最終閲覧)
- (2) 同ウェブサイト「都市公園の種類」https://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/p_toshi/syurui/index.html (2020年 7 月28日最終閲覧)
- (3) 北海道公式ホームページ「北海道の都市公園 (北海道内の都市公園について—都市公園の現況)」https://www.pref.hokkaido.lg.jp/kn/tn/kgs/homepage/ko/park_genkyo_index.html (2020年 9 月 3 日最終閲覧)
- (4) 北村清彦「都市公園の美学的問題圏」、西村清和編『日常性の美学』勁草書房、2012年、158頁。
- (5) 同掲箇所。
- (6) 札幌市ホームページ「観光統計データ」調査結果詳細「2021年度の来札観光客数状況資料 (別紙)」<https://www.city.sapporo.jp/keizai/kanko/statistics/documents/02bessi.pdf> (2022年 7 月28日最終閲覧)

- (7) グッドデザイン賞ホームページ「2002年度グッドデザイン大賞」<https://www.g-mark.org/award/describe/28248> (2022年7月28日最終閲覧)
- (8) 父との葛藤や少年時代の人種差別の経験などはドウス昌代『イサム・ノグチー 宿命の越境者』(講談社、上下巻、2003年)に詳しい。
- (9) ジョン・バーズレイ『アースワークの地平—環境芸術から都市空間まで』三谷徹訳、鹿島出版会、1993年、80頁。
- (10) バーズレイ (1993)、80-82頁、89頁
- (11) 環境アートの歴史的経緯と自然観との関係については以下の文献が参考になる。西村清和「環境アートと自然観」『プラスチックの木でなにが悪いのか：環境美学入門』、2011年、316-373頁。西村は、現代における環境アートを、「われわれのビオトープであり環境である『世界』が自然と人工の混合で成り立っている、そのかぎりにおいて、われわれ人間の『アルス＝テクネー』と自然との相互作用に主題的にかかわるアートである」という。西村 (2011)、373頁。
- (12) 新見隆はイサム・ノグチの生涯と作品において庭とのいうキーワードが非常に重要であり、「時間の庭」であり、かつ「未来の共感共同体」を実現する場としてモエレ沼公園をみなす。新見隆『イサム・ノグチ 庭の芸術への旅』武蔵野美術大学出版局、2018年、225-258頁。
- (13) 田口慶太によれば、ノグチは日本庭園における造作や地形をさらに昇華させ、人々が互いに交流する「遊び」の場として「プレイグラウンド」というアイデアを生み出し、日本庭園とプレイグラウンドのアイデアの共通項を見出す。田口慶太「セントラルパークのためのプレイグラウンドのプランに関する考察」、新見隆監修『20世紀の総合芸術家イサム・ノグチー—彫刻から身体・庭へ—』平凡社、2017年、117頁。
- (14) 例えば、バリ・ユネスコ庭園、イスラエル・ビリー・ローズ彫刻庭園など。
- (15) ドウス昌代『宿命の越境者 下』(2003) 164頁。
- (16) モエレ沼公園ホームページ「イサム・ノグチ」https://moerenumapark.jp/isamu_noguchi/ (2022年7月28日最終閲覧)
- (17) ノグチと市の担当者とのやり取り、ノグチ死後の計画実行までの経緯と建設過程は以下の書籍に詳しい。川村純一『建設ドキュメント1988：イサム・ノグチとモエレ沼公園』学芸出版社、2013年
- (18) モエレ沼公園造成史と行政と市民の活動については以下を参照。モエレ沼公園の活用を考える会編『アクセス：モエレ沼公園』モエレ沼公園の活用を考える会 (モエレ・ファン・クラブ) 出版、2008年、64-71頁。保科文紀「札幌モエレ沼公園における市民と行政との協働：モエレ沼公園の活用を考える会 (モエレ・ファン・クラブ) の活動」『都市計画』日本都市計画学会、275号 (57 (5) 号)、2008年、112-113頁。
- (19) 以下、モエレ沼公園に関わる治水事業に関しては以下を参照。国土交通省北海道開発局札幌開発建設部『石狩川治水に係わる主な事業【札幌開発建設部】治水100年』、https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/kasen_keikaku/e9fjd600000002ee-att/e9fjd6000000034b.pdf (2022年7月28日最終閲覧)
- (20) 他の候補地として札幌芸術の森美術館、札幌市立高等専門学校などがあがっていた。モエレ沼公園地は「おまけの候補地」であり、ごみ一杯の埋立地にノグチを案内することに市の担当者側には躊躇があったという。川村 (2013)、38-40頁。
- (21) 川村 (2013)、76-78頁。
- (22) 川村 (2013)、192-194頁。
- (23) 市民の有志による文化的活動からMFC設立までの経緯は保科 (2008) 参照。
- (24) 特定非営利活動法人モエレ沼公園の活動を考える会『定款』、2頁。

- (25) NPO法人モエレ沼の活用を考える会ホームページ「活動内容」<http://www.moerefan.or.jp/?content=npo&page=npo> (2022年7月28日最終閲覧)
- (26) NPO法人モエレ沼の活用を考える会ホームページ「設立趣旨」<http://www.moerefan.or.jp/?content=npo&page=aim> (2022年7月28日最終閲覧)
- (27) 北村 (2012)、172頁。
- (28) 札幌国際芸術祭公式ウェブサイト「札幌国際芸術祭について」<https://siaf.jp/about/> (2022年7月28日最終閲覧)
- (29) 創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会編『札幌国際芸術祭2014開催報告書』、2015年、2頁、49頁。
- (30) 札幌国際芸術祭実行委員会／札幌市『札幌国際芸術祭2017開催報告書』、2018年、131-132頁。
- (31) 『札幌国際芸術祭2017開催報告書』(2018)、4頁。
- (32) 芸術祭のテーマ設定の経緯は以下を参照。札幌国際芸術祭実行委員会、札幌国際芸術祭2017ウェブサイト「テーマ／サブテーマ」<http://siaf.jp/2017/about/themes/> (2022年7月28日最終閲覧)
- (33) 『札幌国際芸術祭2017開催報告書』(2018)、34頁。
- (34) 近年国内外で多数開催されている芸術祭に関しては地域振興の問題が常に課題になる。都市型の札幌国際芸術祭が国際性と地域性のいずれを重視し、地域住民や市民参加を行なうべきかという問題については、札幌国際芸術祭2014事業評価検証会『札幌国際芸術祭2014事業評価検証会報告書』、2016年、37-39頁が指摘している。